

去る十二月上旬のフォード大統領一行の中国訪問については、前回のこの外交時評欄(十一月二十二日付「フォード訪中の意味」)において展望を試みたが、あえて共同声明を出さなかった今回の米中首脳会議の重要な意味は、時日が経過するとともに、私の予想していた通りの結果を、徐々に明らかにしつつあるように思われる。

すなわち、それぞれの立場から最大の戦略的

日にハワイで発表した「新太平洋ドクトリン」にたいし、中国が沈黙を守っていることの意味も明らかになる。

なぜならば、「新太平洋ドクトリン」にたいする中国の沈黙は、まさに新ドクトリンにたいする中国の「暗黙の承認」を意味するであろうし、さらに、積極的な支持さえ合意しているようにも思われるからである。

これにたいして、フォード大統領の訪中を機に「緊張緩和に反対する北京」をいっそう激しく

●外交時評

新太平洋ドクトリンと中ソ

中嶋鎮雄 (東京外国語大学助教授)



課題である対ソ関係を大きな紐帯(ちゆうたい)として、いまや米中両国間には論理的には、日本をも組み込んだ「トランス・パシフィック・コアリション」ともいうべき連帯関係形成への強い衝動がある。そして、こうした米中関係の性格の変化によって、台湾問題はいまや米中両国間の「ホット・イシュー」ではなくなつたともいえるのである。

したがって、このような認識のうえに立つならば、フォード大統領がインドネシア、フィリピン両国訪問を終えて帰国する途次、十二月七

非難しはじめたソ連は、十二月九日のタス通信を皮切りとして、「新太平洋ドクトリン」を「米中の結託」というトーンで厳しく批判しはじめた。のみならず、インドシナ戦争後のアジアの新しい国際環境のなかで、激化する中ソの抗争にたいし、ともにその出方が注目されていたハノイと平壤が、いずれも「新太平洋ドクトリン」を批判したことは、中国の沈黙と照らし合わせてきわめて印象的である。

そこには、中ソ対立にたいするアジアの社会主義国の、新しい対応の姿勢が示されていると

みるべきであろう。

すなわち、去る十二月十日付の朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)「労働新聞」は「新太平洋ドクトリン」を、「ニクソン・ドクトリン」の「代理戦争路線」が破たんした条件下における反革命戦略である——とキメつけた(朝鮮中央通信、十二月十日)。ついでその三日後、ベトナム労働党機関紙「ニャンザン」は十二月十三日付に、米日の共謀がフォード大統領の「新太平洋ドクトリン」の柱となつている——とする論文をかかげて、同ドクトリンを真っ向から批判している。

このようにみえてくると、今回のフォード訪中とそれにつづく一連の国際関係の展開は、衝動的なハブニングとしての強烈な前奏を伴った七年のニクソン訪中以上に、今後のアジアの国際関係に大きな影響を与えていくのではなからうか。

わが国としては、当然、そのような国際政治の底流を十分に推察していくべきであろう。いまや、新しい年を迎えて「外交案件を一つ処理する」といった、安易な対応をしていてよい時代ではなくなつたのである。

新年早々にも「覇権」問題でふたたび動きが出そうだというおりに、問題は本質的なところでとらえていかなければならない——と、あえて強調しておきたい。